

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ

2021年11月14日(日)

黒田 禎一郎

主 題：「御国を待ち望みつつ」

—ともしびを持ち—

テキスト：第2ペテロの手紙3章10～13節

はじめに

- ・今の世界は、じつにめまぐるしく動き展開しています。
スピード感がなければ、とても付いていくことは容易ではありません。時間で
す。時間が速く流れているのです。日本中が、その流れの中にあります。
- ・しばらく前ですが、どこかの交通標語で次のような看板を見たことがあります。
す。「せまい日本。そんなに急いでどこへ行く！」まさしく的を得た交通標語
でした。時間が進んでいくことよって、歴史は刻まれていきます。
- ・歴史についての考え方には、私は次のようにあると考えています。
 - ① 歴史は繰り返す（ヒンズー教の輪廻節）
 - ② 歴史は積み重ねられる（ドイツ語の歴史 Geschichte）
 - ③ 歴史にははじめがあり終わりがある
- ・皆さん。私たちはどのような歴史観を持っているのでしょうか？
聖書の歴史観は、③「歴史にははじめがあり終わりがある」です。
神が天地を創造されたはじまりがあり、そして終わりがあります。私たちはい
ったいどこに向かっているのでしょうか。
- ・今日は、使徒ペテロが書いた第2ペテロの手紙3章から、その大切なことを学
びたいと思います。 2点

大切なポイント

1. 主の日が来る

3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響き
を立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくな
ってしまいます。

1) 主の日

- ・「主の日は盗人のようにやって来ます」とあります。盗人が来ることを知って
いる人はいません。聖書はそのように、いつ来るか不明なのが「主の日」であ
ると述べました。「主の日」とは「終わりの日」、すなわち神が最終的な審判を

- 下される日のことを意味します。
- このような歴史のとらえ方が、世界観、時代認識です。それは、この世界がどこから始まり、どこに向かって行くかという歴史のとらえ方です。
 - ところで、この世界には神が造られた被造物がありますが、それらを見渡すならば、どうでしょうか。植物にも、昆虫にも、動物にも、そして人間の一生にも、はじめがあり、終わりがあります。私たちは目の前の動物や植物のいく末を観ることで、地上のいのちには「はじめと終わり」があることが分かります。それを否定する人は誰もいないでしょう。
 - このような聖書の世界観は、決して架空の絵に描いたようなものではありません。旧約聖書の第1ページには、神の創造（はじまり）が書かれています。そしてはじめが書かれただけではありません。いいえ、世界はどこに向かうかしているのか、その目標（ゴール）も書かれています。
 - 私たちはその世界観に基づいて、今をいかに生きるかを考えるべきです。例えば、シンプルな質問ですが、私たちはどこから来て、どこへ向かっているのか、という問いです。答えを出せる人はいるでしょうか？ 誰も答えを持っていません。ですから自分の存在意義を見出せないのです。しかし聖書はその問いに、明確な答えを持っています。
 - それは先ず、私たちをお造りになられた創造神が存在されることです。その神が私たちの歩みを導き、私たちがどこへ向かうべきかを示してくださっているのです。
 - 「主の日」とは、やがて神が最後の最後にすべての審判者としてお立ちになり、神の正しさによって、すべてをさばかれ、ご自身の義を現される時のことです。
 - 3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。
 - 「なくなってしまう」とは、信じがたいかもしれませんが。しかし、あの9・11事件を、阪神大震災を、また東北大震災を思い出してください。今まで存在していたものが、「なくなってしまう」とは夢ではありませんでした。そして「天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう」とあります。それは神の審判が下る恐ろしい時です。それが「終わりの日」であります。

2) 終わりの日

- その時、世界はどのようなになるか聖書は語っています。
- I 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけ

ません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。1コリント

- 皆さん。今の時代、多くの悪の行為や、悪い思いが闇の中に隠されています。悪い者が大手を降って歩き、正直者が馬鹿を見るような不条理が私たちの住む社会にはあります。そして神がおられるならば、どうしてそのようなことに沈黙されるのだろうか、無力感さえ覚えることがあります。
- しかし、いつまでもそうではありません。神はやがて「終わりの日」には、正しいさばきを行われます。創造神はご自身の正しさに基づき、審判をくだされると約束しておられます。

3:13 しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

「主の日」は神の正しさが現れる時であるとともに、神の正しさに基づいて生きてきた者たちの労が報えられる時でもあります。

4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。1コリント

- 神を信じて正しく歩む者は、その日を待ち望みつつ歩むことができます。なぜなら、私たちの罪と咎はイエス・キリストの十字架の御血によって、洗い清められているからです。そして神の子とされました。神の子とされた者には、神がおられる神の国の相続権が与えられています。私たちはその神の国に入る日を喜びとするものです。

2. 目を覚ましていなさい

1). 備えなさい

- ペテロは10節で「主の日は盗人のようにやって来ます」と述べましたが、彼はイエスが言われたおことばをきつと覚えていたことでしょう。イエスは次のように言われました。

マタイ24章

24:42 ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。

24:43 次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。

24:44 ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。

- 主の日がいつ訪れてもよいように、目を覚まして備えていなさいとイエスが勧められたたとえば、他にもあります。 マタイ福音書 25 章

25:1 そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。

25:2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。

25:3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。

25:4 賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。

25:5 花婿が来るのが遅くなったので、娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった。

25:6 ところが夜中になって、『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。

25:7 そこで娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた。

25:8 愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』

25:9 しかし、賢い娘たちは答えた。『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』

25:10 そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝宴に入り、戸が閉じられた。

25:11 その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。

25:12 しかし、主人は答えた。『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』

25:13 ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。

- ここに 5 人の愚かな娘と 5 人の賢い娘が登場します。彼女たちの務めは花婿を出迎えることでした。彼女たちがともしびを持っていたのは、花婿の到着時間が遅くなるということが、ある程度予想してからでしょう。この時、花婿の到着が思いのほか遅れたため、皆うとうと眠り始めてしまいました。
- 真夜中を過ぎて、花婿到来を告げる声が闇の中に響き渡りました。そこで娘たちは飛び起きて、それぞれ自分のともしびを整えたのですが、愚かな娘たちのともしびは今にも消えそうでした。彼女たちはともしびは持っていたが、花婿の到着が遅れて火を灯し続けるだけの油は持っていませんでした。
- そこで彼女たちは、賢い娘たちに油を分けて欲しいと尋ねましたが、分けるに十分ではありませんでした。愚かな娘たちは町へ油を買いに行っている間に、

花婿は到着してしまいました。十分な油を用意していた賢い娘たちは、ともしびを整え、花婿を出迎え、彼と一緒に祝宴に入って行きました。一方、遅れてやってきた他の娘たちのためには、もはや戸は開けられることはありませんでした。これが、このたとえ話です。

- このたとえ話で「目を覚ましている」とは、何を意味しているのでしょうか。先ず 10 人の娘たちの共通項を考えると、ともしびを用意していたこと、そして花婿を待っている間にうとうと寝入ってしまったことでした。
- では何が違っていたのでしょうか？
→ともしびを照らし続けるために、必要な油を用意していなかったこと。
- このたとえには花嫁は出てきません。このたとえの中心は、10 人の娘にあつたからでしょう。聖書では、普通花嫁はキリスト教会、またクリスチャンをさします。ですから、ここでは 10 人のクリスチャンを指しているのではないかと思います。油は聖書において、「祈り」を象徴するものです。私たちはいつも目を覚まし、祈り続ける者であるべきと思います。

2) 待ち望みなさい

3:11 このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。

3:12 そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。

- やがてすべてのものが明るみに出され、神の正しいさばきが行われる日のことを思います。それは神の義に生きようと願う者には、大きな励ましです。そして確かな自覚を迫られることでもあります。
- ペテロは、「(その日の) 到来を早めなければなりません」と述べました。人類の歴史(時間)を支配しておられるお方は、神お一人です。私たちがそれを早めたり遅らせたりすることなど、できるはずはありません。
- では、なぜペテロはこのような表現を用いたのでしょうか？
→それは終わりの日は近づいているゆえに、キリストの福音を宣べ伝えることの大切さを訴えたからではないでしょうか。
- イエスは次のように言われました。
マタイ福音書 24 章
24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。
- 終わりの日の前に起こることとして、御国の福音は全世界に余すところなく宣べ伝えられるとあります。それは神の御心です。昔とは違い今の時代は SNS

が急速に発展し、短い時間で全世界に福音が届けられることが可能な時代となりました。

- そこで大切なことは、敬虔な信仰をもって、御国を「待ち望む」という姿勢です。それは祈りともとれます。「主の祈り」の一節に、「御国が来ますように」という一節があります。それは「神の国」が訪れますように、という祈りです。
- 私たちはそのように祈りはしています。しかし、あまりに目先のこと、この世の事柄に心を奪われ、神の国のことを後回しにしてきたのではないのでしょうか。
- 「御国が来ますように」と主の祈りを唱えながら、私たちの心はそこに全く向いていないのです。それはまさしく、イエスがお語りくださった10人の娘たちの姿に似てはいないのでしょうか。
- 花婿が来られる「主の日」を待ち望むべきであるにもかかわらず、眠り込んでしまっていないのでしょうか。みことば次のように勧めています。

1テサロニケ人への手紙5章

5:6 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。 1テサロニケ

ま と め

主 題：「御国を待ち望みつつ」

—ともしびを持ち—

- 主は今日も、みことばを通して私たちにお語りくださいました。今の時代は、終わりの時代です。終わりの時代に生きる者として、私たちはともしびの油を持ち、御国に入ることを待ち望み歩むことです。
- 今日のメッセージのまとめとして、次の聖句を引用します。

3:13 しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

* God bless you !